ポローニア
paulownia

筑波大学附属学校教育局
広報誌 ポローニア

令和7年2月28日 発行
通巻第62号

62

【巻頭言】 附属学校教育局 次長 尾白泰次「次期学習指導要領の改訂に向けた検討がスタート」

2 三浦交流行事 ー11校が一つになる集いー ―――― 齋藤 豊
3 大学との連携 筑波大学医学群アドバンストコース開催 ―――― 前田智洋
3 駒場の探究 ー研究発表を中心とした国際交流ー ―――― 阪田卓洋
4 異学年集団での合同道徳の取組 ―――― 平原奈津美
4 自然の素材でみんなで遊ぼう ～秋のお楽しみ会～ ―――― 田上幸太
5 沖縄の課題と将来を考える企業訪問プログラム ―――― 毛利 哲
5 楽しかった修学旅行を劇にしよう ―――― 佐藤 豪
5 「T-GAP：Tsukusaka-Global Action Program」最終報告会を開催 ―――― 梅澤 智
6 令和6年度教育実習、研究授業を終えて ―――― 工藤 滋
6 世界に羽ばたく「日本の授業研究」 ―――― 大野 桂
7 主体的に取り組む条件と効果を語る1年生 ―――― 関谷文宏
7 トップスポーツ選手（陸上競技）との交流活動 ―――― 渡邊明志
8 令和6年度第19回筑波大学朝永振一郎記念「科学の芽」賞表彰式・発表会開催

筑波大学
University of Tsukuba

附属高等学校　美術Ⅱ（デザイン）「光をつつみこむかたち」

巻頭言

次期学習指導要領の改訂に向けた検討がスタート

附属学校教育局 次長 尾白泰次

OSHIRO TAIJI

昨年12月末に文部科学省において次期学習指導要領の改訂に向けた検討がスタートしました。大臣から中央教育審議会に対し、教育課程の基準等の在り方について諮問をしたというものです。学習指導要領はおおむね10年に一度、見直しが行われています。現行の学習指導要領に基づく各学校の教育課程の実施は始まったばかりですので、もうそんな時期がきたのかという感じではないでしょうか。

今回の検討の方向性として、主な審議事項が4点示されています。詳しくは文部科学省のWEBサイトをご覧ください。

①質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方
②多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方
③各教科等やその目標・内容の在り方
④教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合うことを含む、
　学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策

学習指導要領は法規としての性格を有する教育課程の大綱的な基準であり、各学校は学習指導要領に示す内容を漏れなく取り扱った上で、様々な学習指導上の工夫が可能となっています。

国立大学附属学校としては、まずは教育課程の基準としての現行の学習指導要領を踏まえた特色ある教育課程や学習指導に関する研究や実践に取り組むとともに、次期学習指導要領の改訂に向けた検討の状況を睨みながら、取り入れられるものは今から取り込んでいくといったモデル校としての積極的な取組が期待されます。

【文部科学省WEBサイト】
初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）　令和6年12月25日中央教育審議会
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/mext_00003.html

三浦交流行事
－11校が一つになる集い－

附属久里浜特別支援学校長 齋藤 豊

ゆるスポ交流サウンドテーブルテニス

探索型工作での作品づくり

10月13日（日）、附属久里浜特別支援学校を会場に「三浦交流行事 －11校が一つになる集い－」が行われました。全附属学校からの参加があり、様々な年齢、個性のある76名が交流しました。

活動の企画と運営は、生徒実行委員として各附属学校から集まった、25名の中高生が行いました。「全員が楽しめる」を実現するために話し合いを重ね、様々な障害のある参加者に対して、どのように接してほしいのかを分かりやすく伝えるための動画を作成したり、読みやすく、分かりやすいしおりを作ったり、全員が参加しやすい活動内容を考えたりしました。

当日、会場校以外の参加者は、文京校舎からバスで会場へと向かいました。バス内では実行委員が作成した「障害理解動画」の視聴やゲームを行い、親睦を深めました。到着後は会場校の児童を含めて10班に分かれ、「ゆるスポーツ」をアレンジした、風船バレーとサウンドテーブルテニスを行いました。様々な障害がある参加者や小学生も楽しんで参加することが出来、班員同士のつながりが深まりました。昼食後は、校内のチェックポイントでクイズに回答して材料を集め、それを使って工作を行う、探索型工作を行いました。材料の中にはプログラミング可能なIoTブロック「MESH（メッシュ）」等もあり、それぞれの班がアイデアを出し合い、様々な工夫を加えながら工作を進め、工作テーマの「海」を表現することができました。

自分たちで作りあげた交流会、そして、得られた経験を次年度へとつなげていってほしいと思います。

交流に参加した児童生徒

大学との連携 筑波大学医学群 アドバンストコース開催

附属視覚特別支援学校 鍼灸手技療法科主任 前田智洋

去る令和6年9月6日(金)、専攻科主催で医学群アドバンストコースを実施しました。これは、将来医師を志す筑波大学医学群学生の皆様が視覚障害者の職業としての鍼灸手技療法及び理学療法を知り、視覚障害に関する理解を深めることを目的に毎年行っています。今年度も7名の医学群学生が参加しました。

はじめに山口副校長から、視覚障害教育の歴史や現状、視覚障害補償機器など、視覚障害全般に関わる説明がされました。その後、各科でのカリキュラム等の紹介や授業見学で、鍼灸・あん摩マッサージ指圧師、理学療法士を目指す生徒が、どのような内容の学習をしているのか、また視覚障害のある生徒がどのように学習方法を工夫しているのか知ってもらう機会となりました。

さらに本校鍼灸手技療法科において、生徒からあん摩施術を受ける時間、生徒と交流する時間を設定し、専攻科に関する職業や鍼の効果、当事者の生活について実際に体感する活動を行いました。参加学生からは、「学習の様子、歴史、また視覚障害者の仕事などについて体験型で学べてすごく身になった」、「鍼治療を体験し有効性を実感できた」、「普段視覚障害の方と関わる機会がないので、このような機会が定期的にあると視野が広がってとてもよい」といった感想がありました。今後も大学と連携しながら、職業教育を通して、視覚障害への理解を深める活動を継続していきたいと思っています。

鍼灸手技療法科での施術体験

理学療法科の説明

駒場の探究 ー研究発表を中心とした国際交流ー

附属駒場中・高等学校 司書 阪田卓洋

12月16日(月)から21日(土)までの6日間、本校の高校1・2年生16名が姉妹校である台中市立台中第一高級中学(以下、台中一中)を訪問し、授業参加や研究発表を通じて親睦を深めました。このプログラムは、SSHの一環として2009年にスタートし、今回で13回目を迎えます。

この交流のメインイベントは、訪問3日目に行われる研究発表会です。今年は筑駒から7本、台中一中から7本の計14本の発表が行われました。筑駒生の発表は数学、物理、化学、情報など、自身の興味・関心を掘り下げた研究が多い一方で、台中一中生は、大学と連携しながら、医学を含む高度に専門的な研究発表を行う傾向が見られます。この違いは双方にとって刺激的であり、合間に行われたポスターセッションの時間も活用して、両校の生徒たちは1日をかけてお互いの研究について意見を交わしました。

このプログラムの大きな特徴は、「学術的な」交流を通じて台湾の生徒と友好関係を築ける点です。参加した生徒たちからは、次のような感想が寄せられました。「ただの娯楽としての学校交流ではなく、学問的な交流から文化的な交流まで、ある意味本質的で奥深い交流ができたと思います」。「研究発表や、学術オリンピックなど、同じ分野に興味をもつ良友を前に言語の壁は問題にならない。私も刺激を受けたし、同時に台中一中生も刺激を受けたという話が聞けた。」

台中一中という良きパートナーと共に、今後も研究交流をさらに充実させていきたいと考えています。

研究発表をする本校生徒

ポスター前で議論する両校生徒

異学年集団での合同道徳の取組

附属桐が丘特別支援学校 小学部 教諭
平原奈津美

本校小学部では、1年生から6年生の児童が集まって学ぶ「合同道徳」を年間を通して実施しています。普段は、一学級5～7名の小集団での学習が基盤であり、大人数での学習や他学年と共に活動する機会が多くありません。そのため、「合同道徳」を通して、異年齢の児童が協働しながら多様な考え方や感じ方に触れ、価値観を広げることを目的としています。

どのテーマでも授業構成を統一し、児童が授業の見通しをもてるようにしています。冒頭は、様々な実態の子供たちが学習主題を理解できるよう、ペープサートを用いたり教員が劇を行ったりしてテーマを伝えます。その後は縦割りグループに分かれ、高学年がリードしながら意見を出し合います。最後は再び集合し、全体で意見を共有します。

正直・誠実を主題とした取組では、「先輩の作品を壊してしまった友達を見かけたらどうする?」というアンケートを事前に行い、多様な意見を聞く中で、再び自身に問いかける機会を設定しました。正解だけを求めたり、他者の意見に賛同しがちな傾向のある児童もいますが、このような取組を重ねることで、「自分だったらどうするか」をじっくり考えたり、「やっぱりこう思う」と自分の言葉で伝えようとしたりする姿が確実に見られるようになっています。

また、「合同道徳」は小学部全ての教員が授業づくりに参加しています。特性に沿った主題の伝え方や、授業後の一人一人の行動変容の見取り方などについて協議することで、授業づくりの研鑽の機会にもなっています。

テーマ「よりよい学校生活、集団生活の充実」グループ活動の様子

テーマ「正直・誠実」冒頭の様子

自然の素材でみんなで遊ぼう ～秋のお楽しみ会～

松ぼっくりけん玉

附属大塚特別支援学校 小学部 主事
田上幸太

本校は、文部科学省より研究開発学校（令和4～7年度）指定を受け、生活科・社会科・理科について横断的で連続性のある学びを目指したカリキュラム・モデルの創造に取り組んでいます。

小学部では、新たな取組として、「秋のお楽しみ会」を行いました。5・6年生が生活科の単元「季節探しに出かけよう」で採集してきたどんぐりや松ぼっくりを使い、単元「あきのおもちゃでたのしもう」で玉入れ、どんぐりマラカス、松ぼっくりけん玉などのおもちゃを作って遊ぶ活動に取り組んできました。さらに、そのおもちゃを使ってみんなで遊びを楽しむイベント「秋のお楽しみ会」を5・6年生が企画し、1年から6年までの児童と学部の教員全員で遊ぶという、学びを繋げ、他者と共有しながら深めていく活動を行うことができました。

小学部プレイルームいっぱいに設けた遊びのコーナーを児童が回り、5・6年生から遊び方を教えてもらいながら楽しみました。マラカスを使って元気に踊る姿や手作りの箱にどんぐりや木の枝など自然の素材を投げ入れて遊ぶ姿、ちょっと難しいけん玉に繰り返しチャレンジする姿、そしてそれを応援する5・6年生や教員。これまでも、学部合同の季節のお楽しみ会に取り組んできましたが、教科の学習を通して身につけた見方・考え方を生かしながら、「お楽しみ会」に展開していく活動は児童だけでなく教員にとっても新鮮な経験となりました。

秋のお楽しみ会

自然素材の玉入れ

沖縄の課題と将来を考える企業訪問プログラム

附属高等学校 教諭
毛利 哲

本校2学年の修学旅行では、沖縄にゆかりのある13の企業や団体をグループで訪問するプログラムを実施しました。その様子の一部を紹介します。

・株式会社沖縄環境保全研究所　環境アセスメントの学習と、干潟にて沖縄固有種ハゼの調査をしました。将来、生物の研究者を志望する生徒も多く参加し、絶滅危惧種の救済に取り組みたいとの意欲を新たにしていました。

・株式会社FMよみたん　生放送番組の構成を考え、実際に番組へ出演しました。創設者の地域振興への思いに感動する生徒も多く、自分達が地域のためにできることを話し合いました。

・NPO法人ちゅらゆい　団体が支援をしている現地の中高生と共同で、理想の学校について議論しました。活動を通じ、沖縄ならではの課題を抱える子供たちの支援策はどうあるべきかを考えました。

FMよみたん

環境保全

楽しかった修学旅行を劇にしよう

附属久里浜特別支援学校 教諭 佐藤 豪

小学部6年生は、11月21日、22日に箱根へ修学旅行に行きました。その思い出を他学年の友達や先生にも伝えるために、皆で「僕たちの修学旅行」という劇にして発表する学習に取り組みました。

台本のせりふを読むだけでなく、サインや動きを付けて表現したり、劇中のナレーションを考えたりしました。ナレーション作りでは、霧で景色が真っ白だったロープウェイの写真を見て「霧の中から発進！」とユニークなせりふを考えた児童もいました。

発表会当日は残念ながらお休みの児童もいましたが、鑑賞してくれた先生たちの前で、大きな声で堂々と演じることができました。鑑賞した先生からは「楽しかったことが伝わったよ。」とコメントをもらい、楽しかった思い出を表現することができました。

レストランのシーン

劇のナレーション作り

「T-GAP:Tsukusaka-Global Action Program」最終報告会を開催

附属坂戸高等学校 農業科 教諭 梅澤 智

本校では、2年生のキャリアコア科目として、社会課題を発見し、他者と協働しながら解決に向けたアクションを実践する「T-GAP」を実施しています。このプログラムでは、生徒たちが興味関心の近い者どうしでグループを組み、アクションのテーマを探すところから活動してきました。地域の皆さんやグループの仲間と協働しながら取り組むことで、社会の中で生涯に渡って学び、行動していく素地を培うことのできた10か月間でした。

12月10日には、最終報告会を開催しました。多くのグループが、活動の成果を1枚のポスターにまとめることに苦心しながらも、お世話になった方々へ還元すべく工夫を凝らす様子がみられました。私たち教員は、生徒たちに、この学習で育んだ力を基に、最終報告会以降も地域や社会で持続的に行動する人になってほしいと願っています。

T-GAP最終報告会の様子

令和6年度 教育実習、研究授業を終えて

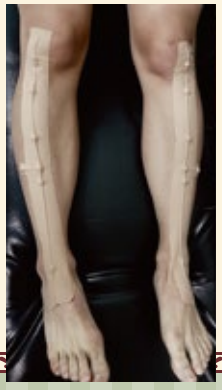
理療科教員養成施設 助教　工藤 滋

令和6年10月21日から6週間にわたって実施された教育実習が終了いたしました。本施設は、文部科学省が指定した特別支援学校自立教科（理療）の教諭の教員養成機関です。そのため、毎年卒業学年である2年生が、附属視覚特別支援学校鍼灸手技療法科の先生方のご指導の下、視覚障害のある生徒にわかりやすい授業を目指して、実践の場で学びを得ています。

最終日である12月2日には、3つのグループに分かれての研究授業と、その授業の振り返りを行う合評会が開かれました。1つ目のグループは、経穴概論の授業の際、ツボの位置を触覚で理解しやすいように、情報を厳選した自作教材を活用して授業を行いました。2つ目のグループは、生徒の少人数化で多様な生徒の意見を聞く機会が減っている点に着目し、東洋医学の症例問題を解くグループワークにチャットGPTを1人の生徒として参加させました。3つ目のグループは、体内の固くなった組織を体表から触察したり、その部に向けて鍼を刺したりする練習のための自作教材を使って鍼実技の授業を展開しました。生徒の実態を把握した上で、指導・支援の方法を検討し、実践するという教育実習の経験は、4月から視覚特別支援学校の教壇に立つ学生にとって、何にも代えがたい貴重な宝となったはずです。視覚障害者の職業自立を支援するために、全国で活躍してくれることを期待しています。

東洋医学概論、鍼基礎実習、経穴概論の授業者

こんにゃくの中にニンジンを入れて作成した刺鍼練習器



各経穴と経穴間を結ぶラインを足に貼り付けた教材

世界に羽ばたく「日本の授業研究」

コペンハーゲン公立学校での公開授業

附属小学校 教諭　大野 桂

9年前、コペンハーゲンで初の算数授業研究会が開催された。日本の『授業研究』に感銘し、「自国の教育を変えるために、日本の『授業研究』を取り入れたい」と、授業研究会開催に向けて力を注いだのが、コペンハーゲンのヤコブ氏である。それから、我々筑波大学附属小学校算数部は、ヤコブ氏と毎年コペンハーゲンで授業研究会を開催している。

それから6年。イギリスはケンブリッジ大学附属小学校で、算数授業研究会を実施するに至る。これも、ヤコブ氏の「日本の授業研究は、ヨーロッパ中に広めるべきだ」という強い思いが、イギリスの研究者の心を動かし、開催に至った。イギリスを取り仕切ったのは、日本の『授業研究』をイギリスで推進していた「CLR」という研究団体の代表で、ノッティンガム大学数学教育教授のジェフ氏である。ジェフ氏も、「自国の教育を変えたい。そのためには、日本の『授業研究』が必要だ」という強い思いを持っており、我々は、その思いに動かされ、それから毎年、イギリスでも算数授業研究会を開催している。

今年度も、10月にコペンハーゲンとイギリスはエクセター大学で算数授業授業研究を開催した。どちらの国も、現在の研究課題は「カリキュラム」である。「日本の算数カリキュラム」を研究し、それを自国に取り入れようと取り組まれている。その実現のため、我々算数部員は、「算数カリキュラム」についての講義と授業公開を提供するなどして、ともに研究を進めさせていただいている。

そして来年度。新たな国で、開催される動きがある。

エクセター大学での講義

イギリス公立小学校での公開授業

主体的に取り組む条件と効果を語る1年生

附属中学校 研究部
関谷文宏

感情と理性の働きをもとに主体性を引き出すコツを考えた図

11月に実施された本校の研究協議会には全国から約500名の参加者が来校しました。午前中の全体会では、1年生の発表希望生徒26名が参加者に対して「主体的に学習や行事に取組むための条件や効果」について自分の考えを語り、質疑応答や意見交換を行う機会を設定しました。生徒は「段階的な目標」「クリティカルな視点」「強い意志」「柔軟性」「リフレクション」「聞く態度と話す態度」「クラス・学年を超えた交流の発展」などをキーワードに、失敗体験や成功体験を踏まえて参観者に熱心に語っていました。3年生がファシリテーターとして進行を担当し、難しい質問に対しては適度なアドバイスもしながら上手にフォローしてくれました。

参加者からは、「主体性に関するモヤモヤとしていたものが明確になった」「生徒が学校の方針をよく理解し、学習や行事を大きな成長の場と捉えていることがわかった」「自分たちが主体となって取り組む自治活動が日常化しており、それが校風になっていることがうらやましい」「等身大の考えが素敵だった」「先生方が一枚岩になって生徒と向き合っていることがわかった」などの感想をいただきました。

3年前の研究協議会全体会は探究活動をテーマに生徒が司会進行を務めたのですが、高校3年生になったその生徒に今回の司会をお願いし、最後のまとめのコメントも任せました。即興で紡ぎ出された先輩としての言葉に会場にいたすべての人が感動する良い締めくくりとなりました。

キーワードを順番に発表する生徒

会場内をブロックに分けて発表する生徒

トップスポーツ選手（陸上競技）との交流活動

附属聴覚特別支援学校 教諭
渡邊明志

バランス運動に取り組む児童と田中さん

令和6年11月、2024パリオリンピック女子100mハードル代表の田中佑美さん、2022オレゴン世界陸上男子110mハードル代表の石川周平さん（ともに富士通所属）を講師に、本校の小学部児童を対象に陸上運動教室が開かれました。この活動は千葉県のトップ・プロスポーツ連携事業「ちば夢チャレンジかなえ隊派遣事業」の一環として行われ、約40人の小学部児童と交流を深めました。

活動は低学年と高学年に分けて実施され、低学年は片足立ちの運動やジャンプをしながら行う鬼ごっこ、グループ対抗の足じゃんけん、高学年は片足立ちをしながら両手を上げてバランスを保つ運動や「島おに」と名付けたユニークな鬼遊びなど、いずれも走・跳の運動を伴う活動を楽しく指導していただきました。

活動後、児童の「どうすれば足が速くなりますか」という質問に対して、石川さんからは「とにかく運動してください！自然と足が速くなるよ」、田中さんからは「たくさん運動したら、疲れますよね？よく食べて、よく寝てください」というアドバイスをいただきました。また、児童からは「中学生になったら陸上部に入るつもりでしたが、その気持ちが強くなりました」という声も上がりました。

両選手とも次の世界大会に向けて筑波大学の運動施設を拠点に練習を重ねており、特に石川さんは本学のOBでもあります。今回の活動を通じて附属学校を身近な存在と感じ、運動の楽しさを伝えていただくとともに、児童に陸上競技への興味を深めてもらう貴重な機会となりました。

石川さんと「島おに」を楽しむ

令和6年度 第19回 筑波大学朝永振一郎記念「科学の芽」賞 表彰式・発表会開催 (2024.12.21)

附属学校教育局 教育長補佐 梶山正明

12月21日(土)、本学大学会館において、朝永振一郎記念第19回「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校271校及び海外4か国7校（アメリカ、韓国、中国、ハンガリー）の日本人学校等から小・中・高校生部門合わせて2,377件の応募がありました。その中から小学生部門10件、中学生部門8件、高校生部門2件の合計20件の作品を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者22名と付添者40名が出席されました。

本学からは、永田恭介学長をはじめ加藤光保副学長、重田副学長、中内副学長、本間副学長、池田副学長、氷見谷副学長、加藤和彦副学長、呑海副学長、初貝数理物質系長、中田生命環境系長、野呂人間系長、「科学の芽」賞受賞OB・OGの岡村太路さん、佐藤三依さん及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢で約90名となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行委員会副委員長である雷坂浩之附属学校教育局次長の開会の挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に表彰状と盾の授与、祝辞がありました。続く発表会では、部門毎に受賞者による発表と質疑応答が行われました。受賞者達は、スクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告し、副学長の先生方をはじめ会場の参加者からの質問に、身振り手振りを交えて回答をしていました。

最後に重田副学長から個別の作品へのコメントを含む全体総評があり、「科学の芽」賞実行委員会委員長である呑海副学長の閉会の挨拶により無事表彰式・発表会は終了しました。

その後、特別会議室において、「科学の芽」賞受賞OB・OGによるミニ講演会を催しました。講演では、自身の「科学の芽」賞との関わりに触れながら、現在取り組んでいる仕事や研究についてのお話しなどがあり、受賞者は真剣に耳を傾けていました。その後は、受賞者を囲んで、副学長・系長、講演者のOB・OG、実行委員会委員が参加した懇談会が行われ、和やかで楽しい時間を過ごしました。

今年度ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願いいたします。

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア paulownia vol.62

発行日……令和7(2025)年2月28日
発行者……附属学校教育局教育長 呑海沙織
発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌 広報戦略推進委員会
〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1　電話 03-3942-6800
デザイン……スピーチ・バルーン
印　刷……広研印刷　使用紙：U-Ltimax［日本製紙］